

昭和二十四年七月二十三日  
 昭和五十五年九月十五日  
 第三種郵便物認可  
 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三七五号）

63.9.7

次

信心の正因	近角常観	（1）
信を行く旅人抄	池山榮吉	（9）

御一代聞書抄（続・十一）	井上善右衛門	（12）
--------------	--------	------

目

比叡山と高野山	西元宗助	（15）
自照日誌抄（24）のかわりに	木村無相	（19）

攬教照心	花田正夫	（22）
------	------	------

# 慈光

第三十二卷 第九号

# 信心の正因

近 角 常 観

## 真宗と他宗との分水嶺

### 一、和讃に

不思議の仏智を信ずるを 報土の因としたまえり

信心の正因うることは かたきがなかなにおかたし  
私のこれから申そうと思ふ処は、この一首の和讃に尽き  
てある。

二、信心の正因、即ち真実報土の真因は何かというに、  
不思議の仏智を信ずることである。然らばその不思議の仏  
智とは如何。ここが最も肝腎で、最も深く味わはなければ  
ならぬ点なのである。

三、そもそも親鸞聖人が、わが浄土真宗をお作り下され、  
その真宗の骨目は何にあるか。真宗と他の諸宗とを分つ分  
水嶺は何であるかと云うと、即ち不思議の仏智を信ずると  
否とにある。即ち、不了仏智であるか、明信仏智であるか  
が、その分れ目となるのである。  
さすれば、その不思議の仏智を信ずる味わいはどうであ

六、しかしそればかりではなく、一方に丁度これと正反  
対に考えておいでになる方がある。それはここにお出で下  
さる方々にも様々で、中には従來說教を聞きつけておいで  
の方も有る。それらの方の大抵は「このままながらのお助  
けである、ハイと受ければお助けじや」と。これはまた樂  
な考え方をして居らるる方の側である。

即ち、かく一方には「もつとよくならねばならぬ、こん  
なことではいかぬ」というのと、「悪くてもこのままなが  
らのお助けである、ハイと受ければお助けじや」というの  
と、この二様に分れているのであります。

### 初めより事ずみに聞いてはならぬ

七、現に昨日もお出でになった一老人に「あなた此頃心  
持ちが変らぬか」と聞くと、「イヤすつきり変りました」  
と云われる。

「どう変つたか」、「以前はハイ々々と頂くことと思つて  
おりましたに、今はただお慈悲ばかり、このような者をお  
見捨てなきお慈悲ばかりがありがとうございます」と喜ん  
で居られる。聞き慣れぬ方には一寸分らぬかも知れぬが、  
ハイと受けるとお助け、というのと今はごろりと変つてお  
慈悲ばかりが有難いというのと、この間には大変な違い目  
がある。

八、私は一方にかく著しく喜ぶ方があると、自然一方の

るか。言葉では誰も云うことなれども、ここを各自に能く  
ただかねばならぬのである。

### 二種の傾き

四、近頃は個人として聞きにお出での方が非常に多いの  
である。その聞きに来られる方や、こちらに居て色々味わ  
うて居られる方とお話するにつけ、近頃特に私の感ずるの  
は、皆様の考えが大抵二通りになつてある。ことに信仰が  
徹到せぬままに色々聞かれる方々のすべての心の傾きが、  
大抵二通りに分れて居つて、しかもそれが顕著に分れて居  
ることである。

五、先ずお出で下さる真面目な側の方の考えは「どうも  
我々はこんなことではいかぬ」と一言で云うと、この  
考えの方が多い。世間の問題の上につけ「こんな不真面目  
な心持ではいかぬ」また信仰上よりも「もつと喜べそうな  
もの、御報謝が出来そうなもの」と、お出でになる方の十  
人が九人までは、大抵これで来られるのである。

よい加減な聞きようをしている人に対する誠めようが厳し  
くなる。昨日も同時にお出での他の方に手きびしく申した  
のであります。

それは自分は今分つていふという態度で聞く人である。  
それで、私が申すには「あなたは甚だよろしくない。仏は  
お助けじや、救いじやと、初めから事済みに聞いている。  
それでは、今この老人の、ハイと受けるとお救いというの  
と同じである。あなたは、自分は助かる、これでよいとい  
つかど分つた積りで聞いて居らるるも、未だ真に仏のお慈  
悲が分つたのでない」とあけすけに云つたのであります。

九、するとまた、その人の連れて来られた同行が、これ  
を聞いて涙を流して喜んで居られる。けれども矢張り肝腎  
の処が抜けておる。その人の云われるには「此頃らくにな  
らしてもう有難うございます」と。

「なるほど、それでは何ういただけましたか」「かかる  
者をお助けと頂かして貰いました」もうここでとんと行き  
詰つてしまつているのである。

一〇、ここは老人で熱心に、ここに足を運ばれるは、一  
通りならぬ事故、ことに能く聞いてもらわねならぬのであ  
る。

一一、折々ここに聞きに来られた婆さんで、高田の出張  
所の婦人会の世話をして居られた老人が、今度病氣になら

れたのであります。そしてサア死ぬとなったら、死が怖く  
なつて来た。

今まではうかうかして居たが、いよいよ死なねばならぬ  
というので、今ここに居られる老翁に向い「自分はいよ  
いよ地獄一定が知れた」いうので、此の老翁も一緒に涙流  
して喜ぶと、サア婆さんは受け付けられない。どう云うかとい  
うと「自分はもう仏様にしがみつけばかりだ」と。そこで  
「そんな安心はないが」と、その老翁がわざ／＼案じて、  
この問病床を訪ねられたのであります。

一二、老翁が婆さんに向つて「前生の因縁だからあきら  
めよ」と云うと、「そんなこと云うたとてあきらめられよ  
うか」と一言に蹴られてしまつて、此の老翁はび／＼くりし  
て仕舞つた。又親戚の人が「極楽にゆかせて貰うのだから  
安心せよ」と云うと「そんなことで安心が出来るか」と、  
えらく叱りつけたと云うのである。

随分聞き慣れて分つてゐるようであるけれども、唯ハイ  
とお助けという言葉ばかりで、真実のところは頂けて居ら  
ぬと、いよいよとなると皆さんこれになるに決つてゐるの  
であります。

一三、で今この老人が、度々かく諦められぬとはねつけ  
られ、もう云に行けぬと云わるるは無理のない処である  
けれども、今この婆さんにしてみれば、信仰問題はいよいよ

ならぬ」といつて来られたのである。その人は「自分はど  
うも喜べぬでいけない。こんなことでは仕様がな。自分  
はどれだけ聞いてもわからぬ。こんなことでは、法の器で  
ないかと思つ」と訴えられる。かく言われるそこがまた非  
常に味わいのある処なのである。

一七、即ちここで両方をよせると能くわかる。即ち真面  
目な人の側は「これではいかぬ／＼」といふ、一方は、今  
のお婆さんのこれまで聞いていた「ハイと頂くとお助け」  
といふので、まるで正反對である。

そこでこの両方をよせると、今実際は「こんな喜べぬこ  
とでは仕様がな、こんな浅ましいことではどうもならぬ」  
といふ苦しみである。そのまゝのお助けである、ハ  
イと頂くとお助けじや」ではど、だ、軽くて安心の出来よう  
はずがない。自分が今悪くて仕様がなと泣いて居る。処へ  
「仏はその悪い者でも大事ないと云つて下さるのだ」では、  
到底真実の安心が出来ようはずが無い。

#### 然らば大悲の真実は如何

一八、さて真実の処はどうであるか。今の婆さんに私は  
次のように申したが、これはとりわけ御老人にはお分りよ  
く最も適切だと思ひます。

一九、今ここに居られる老人は、その婆さんに「仏法聞  
いて居る者が、何事も因縁とあきらめねばどうもならぬ。

よこれからが本物になる処なのである、今死ぬとなると、  
唯もうイヤだ、苦しくてならぬ、という処が、実に婆さん  
の真剣の処であります。

一四、そこで老人に云いました。「だから真に頂いた者  
なら、実にこれから言つて聞かさねばならぬ処なのであ  
る。今婆さんは、今迄の信仰が駄目になり、落ちるより外  
なくなつて仕舞つて居る。そこで今こそ頂かさねばならぬ  
時が来たのである。言いくいなどは平常、無事の時の  
慰めになら、そう言つていてもよいかも知れぬが、今こそ  
真に知らさねばならぬ。

一五、そこで私は、先日暇を見て婆さんを訪ねたのであ  
ります。婆さんは非常に痩せ枯れて病床に寝て居つた。

この婆さんが矢張り二つ頂きになつて居るのである。即  
ち平日長らくここに聞きに来ていたのであるが、肝腎の処  
は聞かずに、いつもの説教聞く気で、只ハイと頂けばお助  
けと、言葉通りにこしらえて喜んで居たのであるが、今度  
いよいよとなれば、今迄こしらえたものは皆な消え、今度  
は反対にあきらめられぬとなつたのであります。

#### この儘ながらでは安心出来よう筈がない

一六、さて、片方の真面目に聞く人の側は、自分はどう  
しても喜べぬという問題である。これは先日も越前からわ  
ざわざ来られた人があつて、それは「どうしても頂かねば

無常とこの世は初めからきまつて居るのである。御信心聞  
いて居る者が、何事も因縁と思ひきらねばいかぬ」と言つ  
たのであります。婆さんにしてみれば、言われるまでも  
なく、その事はよく解つて居るのである。しかし解つてい  
てもあきらめられぬ処が人間の本心であります。

二〇、これは昨日も私は或る喜んで居られる方に申し  
したところである。「あなたはそんなに喜んで居られるが、  
今ここから帰りの電車の中で倒れぬとも限らぬ、現に先日  
も山座公使は思ひもかけない死に様をせられた。そうなつ  
たらあなた、その喜びは続くまい。そこではこんなに早か  
ろうとは思わなんだがの愚痴は必ず出るにきまつて居る。  
だからあなたのように、やすよろこびしてはいかぬ」と申  
した。

するとその方の言われるには、結局その仕様のない者が、  
死ぬとお助けを蒙るといふ安心の仕方しかなかつたのであ  
る。今この婆さんにしてみれば、かかる一応のお助けなら、  
今まで百万だら聞いている、聞きながらも第一死ぬのがイ  
ヤで苦しんでいるのに、死ぬとお助けではどうしたつて安  
心が出来よう筈が無いのである。

二一、さて私の申し処は何処であつたか、たつたひと、処  
であつたのである。そこで私は「なる程、あなたの心淋し  
いのはもつともである。今迄聞いていた積りであつたので

あろうが、それは言葉だけであつたから、今となつたら如何にもあなた淋しいであろう。又自分一代積んだ財産をイヤな人に渡すのは残念であろう。諦められぬも無理は無いもつともじゃ。しかも友達も沢山あつたであろうが、今自分がこの苦しい心をかかえて死んで行く、その苦しい心中を真に打明け相談出来る者は誰れもあるまいのに、今、仏のお慈悲はそうでない。今あなたの苦しい淋しい、諦められないで、どうにもならぬ、それを云えば他の人はみな呆れて相手になつてくれない、その言うに言えぬあなたの心中を、それだから其処をことさらに遣る瀬なく思召し、その他の者の相手にしてくれぬ、その汝が可哀想で、汝が悪しければ悪しいだけ、いよいよ捨てられぬとある広大の思召しが、仏の御呼声である」と、唯これだけを申したのであつた。

二二、するとあまり言葉が早いので、どうかと思つた程に、唯一言「ハ」と喜ばれた。あまり話が短かつたので、今も他の方にその後はどうかと尋ねると、矢張り、「あれから様子が變つてしまつた」ということである。私が一言いうなり「ア、分りました」と喜んで下されたのである、そばから見て居る人にはほとんど分らぬ程であつたのである。

まのお助けじや」「悪くてもよいのじや」というのでは、結局「先きへさえ行けばお助けじや、死ぬると救うて貰える」というだけのことになつて仕舞うのである。そんなことで今安心が出来るくらいなら、今の婆さんは、前から聞き飽きる程聞いて居つたのである。

二六、然るに今仏の眞実は、そんな極楽にゆくことや、助かることを先きに云うのでない、死ぬとなれば、私共はただ淋しい、助からぬ（助かることでは決しない）、そのして見ようのない地獄行き私の、仕て見ようのない処をかねてより御推量下されて、その仕て見ようのない処が如何にも苦しかり、と疾くより絶対の哀れみを以て待ち受けて下さるのが親様の眞実であるという、ここを頂かなくてはならぬのである。みんなが大抵この処でお助けや、極楽にゆくことを先きに目当てにしてしまうから、いまだかれぬのであります。

### 或る青年の例

二七、今一つは、十年程前から、この学舎に来られる書生の方があつて、今は仙台の高等学校に居られる方がある。先日静養のために、上京せられ、御縁の深い方だから、この学舎にお入れしておいたのであります。

二八、処が多量信仰問題に心懸けて居られたのに、病氣というに、近頃は案外私のお話を聞く模様がない。

### お助けを先き目をつけな

二三、これでよく分るように、今までの唯結果の極楽行きやら、お助けやら、都合の好いことばかりに目をつけて、肝腎の御親切、お慈悲の方がサツパリ頂けて居なかつたのである。だから結果ばかりに目をつけて居る信心は、かくいよいよとなると、サア喜べぬ、諦められぬ、心淋しい、地獄より外にない、となつてく。

すると今度は一方の眞面目な方に一転して「もつと本氣にならねばならぬ。こんな喜べないでは仕様がな」と、遂には「自分は信仰を聞く器でないかしらぬ」などと云うようなことになる。これが又甚だよろしくないのである。

二四、一体、仏法を聞く器でないとは何事ぞ！全体汝が当り前では仕様のない器、人から呆れられ、相手にされぬ器である故に、大悲の親は、その仕様のない器が不便で見捨てられぬとある広大な御眞実でましますのではないかと、ここはどうしてもこう云わねばならぬ。大悲の御まことは、もう、こう申す外に無いのである。私のお婆さんに申したのも要するに唯これだけであつたのであります。

二五、ここは従来同行、信者の人にはよく聞いて貰わねばならぬ。

今いよ／＼となつて「もう喜べぬ、仕様がな、先きは地獄である、真暗である」と悩んで居る人に、唯「そのま

折角有縁の方ゆえ、一つしつかり話してみたいと私の方でも思つて居たのである。ところが先日私の許に来られ、次の様なことを云われたが、それが実に面白いのです。

二九、云わるるに「どうも先生の話は分かりませぬ。何故と聞くと「先生の話は、喜べないのが哀われ、可憐想というお話はあるも、助けてやろうとも仰言らず、下される処の物がな、全く空っぽのように思われます。空っぽでは安心が出来ませぬ。下される物を頂きとう思います」と先ずこつち話であつた。

三〇、そこで「それでは君のはどうか」と反問すると、「私は、歎異抄を読むと、念仏と書いてある、故に念仏を頂くことと思つて居ります」と、甚だしつかりして居る。

「この念仏を下される処が私には有難いのに、先生のは、唯哀われ、可憐想じやと、まるで飯を食うことを目的として居るのに、先生のは唯哀われ、可憐想じやと、まるで、食えぬところが哀われじやというような話では私には分りませぬ」と。

どうです皆さん、食いたい人ばかりであると思つて。それなのに親の苦勞は口先きだけで言つておつて、金さえ貰えばよいの料見で居られるのではあるまいか。それでは、金にばかり目がついている故、如何程言つても届かぬのであります。で私はこれを聴くなり「よくこれ程まで考えた」と思つた。

三一、そこで、次の様に「わしの言うのは、そのいずれの行もおよばぬ者のために、御苦勞の念仏である」と説明し度て／＼ならなかつた。併しここでこれを言うと「ハア分りました」丈けで止まってしまうのである。

三二、そこで私はいきなり先ず叱りつけた。「君、先生のはどうのこののと、一体君はわしを相手に宗乗でも研究する気でおるのか。ここは行信の關係と言つて、随分学者が考究しても分らぬ問題である。それを君は何か道楽にでも研究する気でおるのか」と。その叱りかたが実にひと通りでなかつた。その間に一言半句の説明をまじえず、そのうち夜の十二時過ぎになり、疲れきつて、いよいよ説明する根気もなかつた。

その人があとから言うには「先生がもう帰れと云われるかと思つて居ると、また叱り出される、どうにもこうにも帰る機会さえなかつた」と云つた程であつた。

さては多年の工夫間違ひなりしか

三三、その人帰つて寝ながら、色々考へて居るうちに、ひよつと「先生があれ程やかましく言われる処を見ると、或は自分の考へが間違つて居はせぬか」と、そう一度思い出すなり、サア今迄長い間自分の頼みとして居つた考へが皆ガタガタと碎けてきた。

三四、翌日になり、外の方が聞きに来ていられた席に、

置くなら、お慈悲でも何でもありはせぬ。その仕様の無い処を見て下さる仏智の不思議は、それだから其者が飽く迄捨てられぬとある思召しが、いよいよ不思議の不思議でまします処である。

三六、今の方は、この話を聞くなり、それまでは岩に水かけたようで、どうしてもしみ込まぬ。そこで他の事ばかり思つていたのに、成程、これは方角違ひばかりして居つた。その地獄一定のとも助からぬ者を飽くまでやる瀬ない御まことと聞くなり、さながら海綿に水がしみ込む様に頂けたと初めてお喜び下されたことであつた。

三七、今日世間では、自覚々々と、自覚がやかましい事になつて居るけれど、眞の自覚とは、かく自力の千万仕方のない事が分り、その仕方なき者が遣る瀬なき仰せ一つに蘇生さして頂いた味が、即ち自覚である。しかして斯く仕方のない、やり通せぬ者程いよ／＼哀れに捨てられぬの仏の思召は、実に遣る瀬ない仏智不思議の御慈悲から出るのである。故に「不思議の仏智を信するを報土の因としたまえり、信心の正因、うることは難きがなかなにお難し」と信心の味はこれに極まるのであります。(日講抄録)

その人呼び、茶を飲みながら「皆が真直ぐに茶を飲みさえずればすぐ飲めるのである。処が皆んなが銘々の出来ぬ処を哀れとある肝腎の思召しの方は退けものにして置いて耳の処へ茶碗をあてがって居るから呑めぬのである」とこの話がえらく耳にとまり「成程、今迄はすっかり間違つておつた、これを一つ聞こう」と思つて居る矢先きへ、私が重ねて「君まだ自分の間違ひが分らぬか、こちらの間違ひと居るところが、仏より御覽下さると哀れでならぬではないか。こちらは何か失敗して、親に金の整理をつけて下されと思つて向つて居る。親にすると、その者は、金を渡すとすぐ遁げてしまう奴故、金やろうと言つて下されぬ、それよりも、親にしてみれば、まだ子がまだひとかど出来る気で、金呉れ／＼と言つて居るが、その子の根性の間違ひがあぶなくて／＼目が放せぬとある御親切である。親は子の考へが徹頭徹尾間違ひで、如何にしても間違ひより離れられぬ、そこがいよいよ哀れで捨てられぬとある思召しである」と、つい何気なくこの事をお話した。

三五、これはついでに申しますが、よく人生上の出来事につき、先生に何か善い方法は無いかと、おきき下さる方がある。私に方法がある程なら、何もお慈悲は無用である。すべて人生は最後の処になつて来ると、最早、どうにもこうにもして見ようが無い。かと云つてそのまま放つて

### 七里和上法語

往生不定について二つの病氣がある。

一つには願力不思議とは聞きながら、何かお土産を拵えたいと思つて居る。落着きたい、安堵心になりたいたいの心切になつて、法の御手許を聞受することが後になり、この心に価値をもたせ信心を認めんとするなり。その心の方向をかえて、御助けの御手許をよくよく聞きなさい。自分で往生の大事を氣にかけて心配するよりは、五劫の間ご心配下さつたものと思ひ、自分でわが胸ながめて、早く落着きたいとけわしく思ふより、十劫正覺の暁天から、吾等の往生一定の時節を待ちわび給う大悲の御心は幾倍かわしからんと思ひ、伏して案じる心のむきをかえ、仰いで法の御手許を聴聞せよ。されば何の疑うべきことがあるう。「弥陀大悲の誓願を深く信する」とは、この法の御手許のお力の限り無いのを、そのままに真受するばかりで、我心を深めて信するのではないのじゃ。

二つに往生を認めんと思つて心さきになつて、本願をあつにする病あり。我等の信心は浄土を望んで起すのではない、本願の眞実に安堵するのじゃ。我等は唯本願に乗ずればよい。往生は仏のかたより願力の不思議として治定せしめたもう、のである。

# 信を行く旅人抄

池山 榮吉

今までに大体、聖人の入信の経路から、その信仰の告白という方へ、話がだんだん進んでまいりましたが、どうもこの信仰にはいるという過程において、すこぶる大切な条件、ほとんど必須的な制約ともみなすべきは、信仰上十分に信頼し得べき人のみつかることであります。それは歎異抄の序文に「幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」とあり、口伝抄には聖人の言として「このたび、もし善知識にあいまつらば、われら凡夫からずな地獄におつべし」とあるに徴しても知れましよう。有縁の知識、或は善知識というのが、要するに、この信仰上に十分に信頼し得べき人のことであります。

親鸞聖人してみると、法然上人がすなわちその人でありました。絶対の信頼は自見を取り、払います。親鸞聖人が初めて法然上人にお会いになった時の心持は、まるきり白紙であり、真空でありました。だから、よきひとの仰せが、

あり、両者相待って、そうしようと思わぬのに、そうなたたのであります。体験ばかりあっても、信頼が足りないといふ蓋がとれず、信頼があっても体験が具わらないと、底がありません。

私などの話を教回きかれて、信仰にはいるかたがだんだんありますが、大底の場合、信頼を予想するようです。二三年前のことでした。石川県の方から手紙がきました。ひらいて見ると「まだお目にもかかっていない先生に、いきなり手紙を差上げて失礼で御座いますが、切羽つまつてのことゆえ御許し願います。私は当年二十三才の青年で、目下不治の病に冒されて床にしておりますが、先般ある病院にはいつていましたとき、或人が先生のお書きになった『絶対他力と体験』を貸してくれましたので、読んでおりますうちに、切実な求道の念が催うしてきて、どうぞ確かな信仰を得たいと、しきりに工夫してみました。どうも確かな信仰を得られませんか。こうまでしても得られないとすると、地獄へおちるよりほか仕方がない、と思うと、急に地獄がこわくてたまらなくなりました。

先生、地獄とはどんな恐ろしい所でしょうか。然し私ともう決心いたしました。私は遠からず死んでゆきます、そして地獄へおちます。が、先生は決して地獄におちる人でな

そのままにうつり、上人の信心を一杯にうけいれることが出来たのです。一人の心持、すなはち内的態度というものは、内にみずから反対理由、または反対動機を蔵してないかぎり、必ず相手の心持、すなわち内的態度を、それがあるままに感受する筈のもので、たとへば、人とならんで歩く際、話に気がとられると、自然に歩調が一つになるように、無心をもって人に接するかぎり、その人の考え、感じ、思うことが、おのずから、わが思想、感情、意志となるのは、本来そうなくてはならぬ心理的傾向なのであります。ひとり信仰ばかりがその例外になるわけはありません。

もつとも己を空しくするということは、そうしようと思つたからとて、思つただけでは仲々なれません。それにはそうならねばならぬ因縁がなくてはならない。例えば聖人にしてみれば、一方に、いずれの行もおよび難いという内的体験と、他方に、同様の体験を経た有縁の知識の信頼が

いと思ひます。そこで先生にひとつ折入つてお願いがあるのです。先生がお亡くなりになったら、すぐ地獄へ私に落ちて待つてゐる地獄へ、私を迎えに来て下さいませんか。もし先生がこれを承諾して下さいれば、それ一つをこの世の思出とした死んでゆきます。御承諾下さいれば、こんな嬉しいことはありません。」と書いて、返事をもとめるつもりでしよう、三銭切手が封入してありました。

それからなお追申として、こういうことが書いてありました。「まだお目にかかったことがないのだから、先生は私の顔を御存じないので、迎いに来ていただくのに、それで差支へはないでしょうか。それで私の十七の年に、商業学校を卒業した記念の写真がありますので、それでよろしければ、お送りいたします」とあったのです。私はこれを読んで、ウブな真剣さに打たれました。

平生筆不精の私もさすがにすぐに返事をしたためて出しました。すると、また切手附で、問い合わせの手紙が来る。また出す、またくる。一と月とたつたかたぬうちに、都合往復五回に及びました。そして第二回目の来信には写真が添えてありました。私からはそのときどきの思いつきや、たすねに対する答を書き送りましたが、その都度おもしろいように手ごたえがありまして、初めのたよりが地獄行き

の真黒闇とすれば、二度目ののは、冥さは減ったが、また深い霧におおわれている様子、三度目にはそれもようやく薄らいで、何処ともなく微かな光さえただよう状態、四度目になると、天の一方にうす雲を通して日の影を認め得たおもむき、遂に五回目に至って、いわゆる雲霧を排して青天を見るようでありました。そしてその時には、もう返信の切手はついて来ませんでした。

### 七里和上のことば

阿闍世王が、自分の犯した罪に責められて、非常な煩悶におちいったとき、著婆大臣の勧めに従って、釈尊のみもとに赴くにあたって、途中でヒヨツと大地が裂けて、地獄落ちこむようなことがあつては、という心配から、決して地獄におちる気遣いなしと思われる著婆大臣にしがみついで、同じ白象に乗って貰つて、仏前に詣つたという話があります。この石川県の青年も、地獄行きの怖さのあまり、阿闍世王が著婆にすがつたように、私をたよつた信頼が、鰯（いわし）の頭も信心からで、信仰を促進する御縁になつたように思われます。

○  
京都の豪商、池田清助氏は、鳥尾子爵や、三浦中將に遭つた時、  
「仏教も政府の保護をうけ、日本の国教になるように、我々は努力したい」

とのことであつた。その後、池田氏は御病中の和上をお見舞して、そのことを申し上げると、

「尽十方無碍の宗旨には、日本もなければ外国もない。十方衆生をお相手のご本願であるから、ことさら狭い日本の国教などと運動せぬようにと、九州の田舎の病僧が申したと伝えてほしい」  
と答えられた。

○  
たのめばたすかる、信すれば、救われるということを知る人は多くあるが、たすかるはずでないものを、たすけて下さる阿弥陀仏を知つた人がすくない。

## 御一代記聞書抄（続・一一）

重宝の珍物を調べ経営をしてもなせども、食せざればその詮なし。同行寄合い讃嘆すれども、信をとる人なければ珍物を食せざると同じ事なりと。（第二三〇条）

### 一

この一節の言葉はまことに味い深いものがあります。今ここで「重宝の珍物」とは珍しく得難い御馳走のこと、「経営」というのは広く物事を営む意ですが、ここでは食物を調理することに用いられています。最近、八十一才で逝かれた薩摩島津家の裔子忠彦氏（聖徳太子会々長）は戦後不遇の生活の後、晩年料理の道にうち込まれ「島津風懐石くずし」の著を残されましたが、その常々の言葉は、心のこもる料理こそ相手にささげうるものであると言われています。

阿弥陀仏がこの私に、そのすべての徳をささげ尽くしてご用意下さつた南無阿弥陀仏を、ただ見ているだけで頂戴

### 井上 善右衛門

しないなら、親の心は一体どのようでありましょうか。如何に立派に成就された法の前にあつても、これをこの身に頂戴しなければ全く勿体ない事でありました。それを譬えて「食せざればその詮なし」と言われています。

ここで食するとは、供せられた食物を私の力で食するといふ意ではありません。才市老人は「念仏は親の生肝、親の生肝食べさせて才市を生かす。親の生肝ナムアマミダブツ」と歎じています。多田鼎先生から学生の頃承つたお話ですが、日露戦争の時、二〇三高地の激戦で、両手両足を失い、眼も見えず耳も聞えなくなった兵士が、金沢の陸軍病院に還送されました。ただ一つ残つた口で「おっかあに会いたい、会いたい」と言いつづける。野良から馳せつけてしばしベッドの前に立ちすくんだ母親が、やにわに胸を開いてそのしなびた乳首を兵士の口にねじ込みました。その途端に「おっかあ」と叫んで兵士はその母の胸に顔をうずめたといひます。多田先生はこの話をされて、まこと

に無眼人無耳人であるこの私に、親のせつば詰った心がナムアミダブツと化してこの私に迫って下さっている。それを日光に照らされているものが、フトその光に気づくのが信心でもあるかのように思っていた私は、勿体ない誤りをおかしておりましたと涙して語られた事があります。

## 二

「同行寄合いて談合すれども…」蓮如上人は談合することを常に勤められていきます。人間はそれぞれ自分勝手な聞き方をするものだから、互に自分の領解を語り合うことは大事故なことです。しかしその談合がどうかすると、自分の理解や説明の談義に終る事を深く注意して下さったのが今の言葉です。

もつとも現代の教育は、人間となる教育というよりも知識の教育となつていくものですから、現代人は知性の理解を飛び越えて真実を素直に受取ることが出来ない生い立ちになつていきます。それで一応の知的理解も現代人には無意味ではありませんが、決してそこに止まらなければならないではありません。知的理解は頭にうけ取った概念という一種の輪廊の影であることを確かと心得べきです。

たとえばここに一つの果物があるとします。その果物を眺めて、その色や形や大きさや種類を観察することも確かにそれを知る事の一つであります。が、どれほどそうした知

にその澄める影を宿すように、如来の真実心がこの愚凡の心に来り徹り映えて下さることです。

安心とはそのとき命の帰するところ、依るところを知らしめられ、まことの落着き処に住せしめられる心情であります。「諸の菩薩は功德の法に安住したまえり」という言葉がよく仏典の中に出てまいります。かたじけなくも私もどもまた、この安住処なる畢竟依を得しめられ、知らしめられる身なのであります。

(昭和五十五年七月三十一日)

## 浄専師法話

「念仏申さるべし。これは如来の本願なり。この中に助け給う御計あり、これを信するを弥陀をたのみとは申すなり」

大屋の篤信者、中村嘉衛門翁は師に帰依する所深く、翁が獲信の契機となつた師この法語を常に喜んでいた。

識を得てみても、それは外から眺めたかぎりでの姿にとどまるのであり、それでその果物を真に知り得たのではありません。ではほかにどのような知り方があるか、それは親しくその果物を口にしてその味を知り、その營養を身にうることでありましょう。それを味うことを知らずにただ向うに眺めて云々しているのが現代人の常の姿勢であります。聞法と談合は決してそのような状態に止まるべきではないことを誡めて「同行寄合い讚嘆すれども、信をとる人なければ珍物を食せざると同じ事なり」と申されたのであります。

## 三

砂糖は甘い塩は辛いと文字では書けますが、その甘いとはどういう味なのか説明して見よ、と云われても誰にも出ません。科学は砂糖の分子式を教えてくださいますが、それで甘さがわかるわけではありません。自から砂糖をなめて甘いとはこの味だと知るよりすべはないのです。

宗教の真実性もこれと同様であつて、説明してみても何にもなりません。「宗教は体験してのみ現存する」という言葉はまことにその通りです。その体験の真実こそが信心であり、安心であります。

信心と安心とは同義語として用いられていますが、そこには微妙な味わいの別があります。信心とは秋の月が泥水

## 生

田端明

得がたき人間に生まれさせていただいたのだから、生き甲斐のある人生を送ろう。

二度と無い人生だから明るく生きて行こう。

ハンセン氏病になつたのだから、人生を見なおして行こう。

折角盲目になつたのだから問題の自分に問いかけて心の目を開いて行こう。

自然の法に生かされて居るのだから、生きるとは、死ぬとは、命とは何かを真剣に考えて行こう。

与えられた命だから白骨の身となるまで、汗をふきながら法の鏡に照らされて浄土の道を一步一步間違ひなくふみしめて行こう。

よき種を播いて育ててよき花を咲かせて行こう。

——長島 愛生園にて——



# 比叡山と高野山

——自照日誌抄(24)のかわりに——

西 元 宗 助

まず比叡山と、ついで高野山との多年のご縁について述べたい。わたしは学生時代の最後の夏休みを、卒業論文製作のこともあって、叡山(比叡山の俗称)の根本中堂の奥、北谷の總持坊附属の善学院ですごした。善学院は蓮如堂ともいい、蓮如上人旧蹟と伝えられる粗末なお堂で、昭和六年当時はまだここに電燈がなく、ランプであった。私は京都から夜具類を運んで、ここに独り住み、飯(は)ごうで一日分ご飯(は)を焚いて自炊した。

このようなご縁で、戦後シベリヤから帰還して京都に着くようになってからも、夏になると、こんどは一家をあげてお世話になった。それは毎夏、十日間余で昭和四十三年のころまでつづく。

尤もこれは特例で、もともと比叡山・延暦寺は、戦前から参詣者ないし観光客のためには宿泊施設として「宿院」を設けていて、山上の各寺院は原則として修行者以外は泊

めない。事実またそのような宿泊設備をもたない。私はそのことを心得ていたから、学生時代以来、自炊し、掃除も便所の汲み取りもやり、戦後の場合も家内が自炊道具から寝具まで運んだのである。

だいたい叡山において注目すべきことは、奥の横川(よこがわ)は別として、いつのころからか、多分ケーブルが出来てからであろう、行者以外の僧侶の多くは夕刻になるとケーブルで坂本に下り、坂本附近の自坊に帰えられるし、きたり、のようである。

学生時代の總持坊の住職は林学士の清水大乘師であられたが、師は時折、坂本の自坊から上つて来られて顔を見せられるだけ。いわば私は寺番のようなものであった。(仏光寺派新門の真承さんは葉上照澄師及び堀沢祖門師の指導のもと昭和五十二年秋はここで修行)戦後のご住職は天台きつての学匠の福吉大僧正(遷化)であったが、師もたいがいは坂本の自坊を本拠としておられた。

うになったのである。

まず高野は、地勢的に叡山とは全く異って、現在の交通機関をもってしても京都から約四時間を要し、すくなくとも三回は乗換えなければならぬ。しかも高野は紀伊の山奥の山上の広い台地にあつて、真言宗総本山金剛峰寺(こんごうぶせ)を中心とする。京阪から隔絶した山上の小都市高野町を形成している。そのため五十余の山上寺院は競つて宿坊を経営し、中には三百名前後の収容設備をもつ寺院(この場合は旅館業の認可もうけているという)も相当にあり、その周辺には土産物店は勿論、飲食店、料理店、パチンコ屋、銀行支店などすべて揃つていて、比叡山の場合と全く異なる。

このように両山の異なるのは、その位置する地勢上の相違によるところが大であることはいうまでもないが、しかし又、伝教(最澄)と弘法(空海)と、したがって天台と真言との、それぞれの人格と教学との相異によるところもあるように思われる。それでは如何なる点が対照的なのであろうか。

### 三

一には、高野が奥の院の弘法大師の御廟を本尊とし、上山する人々も御廟をめざして参詣する。それに対して叡山は根本中堂(一乗止観院)のあたりを目ざして人々はお参りする。もとより叡山にも伝教大師の御廟が浄土院にあるが、

どうしてこのように叡山は修行僧を除き、今でも夜は無人に近いのか。一に寒冷で湿気がひどいからであらう殊にじつさい、絶えず琵琶湖から霧が吹きあげて、マッチはしめ、火がつかぬ、布とんはすぐべとべとなる。それに多分、最大の理由は、ケーブル乃至車を利用すれば三十分の近距離に大津・坂本と京都があるからで、山上の茶店等も夕方になると店をしめて下山するのである。

### 二

これに対して高野山とのご縁は、昭和二十七年に高野山大学の非常勤講師(教育学)を引受けてからのことで、それからは支障のない限り、毎夏七月中旬の二週間、集中講義をさせていただいて今日にいたる。そしてその度ごとに、真言きつての高僧といわれた金山穆韶師(高野山管長等歴任、遷化)、ついで伊藤真城師(高野山学長等歴任、遷化)が住職をされた天徳院にお泊めいただいた。ここは高野山きつての名刹で、小堀遠州造といわれる名園もあり、滞在期間中は客人として過分の待遇をうける。今夏も亦心暖いもてなしをうけた。町の人々も、顔見知りになって、またお見えになられたかと挨拶してくださるほど。

このようにして高野とのご縁が深まると共に、この高野山とかの叡山とが、様相を全く異にし余りにも対照的であることを知って、そのことにすくなくからず関心をいだくよ

こは人々にはあまり知られておらず、お参りする方は意外にすくない。そういえば一般に「お大師さん」といえば弘法を意味し、決して伝教大師を指さない。いな最澄が伝教大師であることをさえ、知らぬものが多いのではないか。

また高野山が奥の院を主軸とする、何万何千というおびただしいお墓の群落。霊域をなし、毎日早暁より夕刻にいたるまで、巡礼をはじめ全国各地の庶民が陸續としてお詣りする（だから高野には日本中の顔が集まるという）に対し、叡山には不思議なほどにお墓が見あたらない。したがって又高野のように、そう多くの人が参詣することもない。もとより墓地がないわけではないが、その墓所は主として横川の奥にあつて、それも亦人の目にふれない。

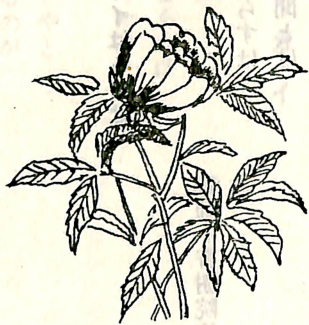
このようにわが国の庶民との親しみという点においては高野ははるかにまさる。叡山は寂として親しみ難いといえるかも知れぬ。しかしその反面、叡山はその開創から今にいたるまで、それだけに修行の山という厳肅な意味をもっているといえる。

高野山にも勿論、修行の道場がないわけではない。げんに真別処（円通律寺）という加行の道場もある。（わが友、木村無相師もかつてここで修行）しかしそれは高野に参る人々の知るところではない。これに対し叡山は龍山比丘の

親鸞の浄土も、日蓮の法華も、すべてがここを源泉とする。

このように伝教（最澄）と弘法（空海）の二大師の思想と人格が、叡山と高野二山のあり方とその歴史に、もとより地勢の然らしめるところも大きかったにちがいないが、微妙に影響しながら日本仏教を形成し、われら国民を多年にわたって長養教化したことに對し、深く感動しながら、あさからざる感慨をおぼえてこの小文を記した次第である

（高野山を下る日）



回峰行にも見られるように、山上の寺々は行者修行の道場という性格を今もなおもっているのである。

○ 高野山は、なんとといっても、いわゆる入定の弘法大師が中心であり生命であつて「南無弘法大師」である。したがつて真言宗はその実大師教というべきである。まことに真言は弘法に始まつて弘法に終り、弘法のあとには殆んどそれを継ぐべき人師を見出し得ないところにその特色があり、かくしていちじるしく土俗化した民衆の仏教となつていったところにその特質があるといえるのではないか。

これに對して叡山の天台は、当初からそのような意味における伝教大師中心ではなかつた。もともと叡山・延暦寺は、伝教（最澄）の発願によるもので、山学家生式に見られるように「道心」を培うための仏教の学府（道場）という性格をもつていた。げんに最澄は自らを「愚が中の極愚、底下の最澄」（山学家生式）と表白し、真如の月を指す我れ（最澄）に帰依することなく、我れの指し求めるところの仏法（真如）に帰依し、仏法を求めよという意味のことを門弟に訓戒している。しかも天台は真言とは異つて全仏教を把握している。故にここ叡山、延暦寺が鎌倉以降のわが国のすべての新仏教の発祥地となつていったことは決して偶然ではないのである。じじつ、栄西・道元の禪も、法然

#### ゲエテ語録

○ 一体物を知つてるといふのは、物を知らない人のいうことだ。知ることが多ければわからぬことが増すものだ。

○ 自分と性質の似ている者を愛してそれを友達にするといふ風な人々と、自分と性質の反對している者を愛してそれから学ぼうといふ風な人々と二様ある。

○ 語謬は絶えずくり返して世に行われてゐる。その故に人は飽くことなく真実を繰り返して述べねばならぬ。

○ 一番初めのボタンのかたがつかない。

○ 遠い考えのある人は一日をよく用いることを知る。

○ 一の時代の中にはその時代を観察すべき地点がない

○ ランプが燃えると油煙が出る。ローソクが燃えると蠟がたれる。滓がなく清浄に輝くのは天の光のみである。

念仏詩抄

木村 無相

ウタガイはるるは

香師おおせに

ウタガイはらすは

五年三年の聴聞とは

思わるるな

久遠劫の願心から

あらわるるとのたまう

香師 香樹院徳龍師

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

仏法

香師おおせに

犬猫が

芝居・浄ルりを

おもしろがらぬは

ウケがわからぬからなり

これほど尊い仏法の

尊さをよろこばれぬは

ウケがわからぬからじや

はれたとおもつ

ウタガイは

わが心では

知れかねるもの

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

心得わけたは

香師おおせに

人に教うるについて

信心の正否を心得わけて

それをいつの間にかやら

我れもまた此の信を得たりと

あやまりておる

心得わけたは

信でない

それは知ったの

そのウケのわからぬ身を  
ウケのわからぬなりに  
助けてくださる法が  
仏法とは――

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ウタガイ

香師おおせに

報謝がつとまらねば

いかがと思ふたり

喜ばるれば

これが信心じやと

思ふたりするのが

ウタガイなり

ウタガイが

わかつたの

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

わたしこと

香師おおせに

〃日夜(にちや)

地獄をこしらえることを

なんとも思わず

あまつさえ

その業を我が思うように

つくらせぬとて

ハラを立てる顛倒の

凡夫なり——

ヒトのことでない

わたしのこと

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仏法の尊さ

香師おおせに

〃かかる不定の命をかかえ

生きのびて聞く仏法の尊さ

知らぬ——

生きのびさせて

くださる仏法——

お聞かせ

くださる仏法——

尊さ知らせて

くださるも仏法——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

# 教を攪りて心を照らす

「汝自身を知れ」とはソクラテスによって人類に与えられた格言である。何事をするにも自分自身を知らないで、失敗に終ることはよく知られているが「鏡はどんなに立派でも鏡自身を写すことは出来ないように、どんな智者も身辺三尺は暗闇である」と仏語にあるように、そのことは非常に至難なことである。

ゲエテ語録に

「人は自分自身を知ることが務めねばならぬ」という格言がある。昔から繰返えし、今日でもよく人の言うことだが、さて不思議な事には誰一人それに従った者もなく、又これからも従いそうにもない。人は自分の周囲にある外の世界に関心をもつが、自分自身については一切注意しない」とある。たまに自分の一部が見えても、身びいきな心から正しい判断は出来ない。それは眼に錯覚があるのと同様に心の錯覚による。

孔子は「十指の指差すところ」を大切に聞けという。成

## 花田正夫

程自分の判断よりはその方が確かであろうが、そこには、是非善悪のきびしく冷たい裁きの風が吹いて、まともに聞くに堪えないものがある。

ここに「子を知るは親にしかず」と俚言にある。親はいつも子の身になって温かく見護る。たとえ子が一時脱線しても、いつも愛児であり、宝息子と信じている。しかし、煩惱具足の身の悲しさには、盲目の愛におちやすいのである。

最後に、一切の衆生をわが一人子とみそなわして下さる慈悲極みなく、智慧限りましまさぬ仏眼にうつるところに、衆生の正体がある。しかも、親は子になくはならぬことのために苦労するように、仏は衆生になくはならぬもの、そしてそれで十分なことのために願を建て、苦行を修して救いの御手をさしのべて下さるのである。

そこに・仏の悲願がどうして発起されたかを省みる時、自分の正体が照らし出される。「弥陀の五劫思惟の願をよ

くよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とわが御身にいただかれるにつけて「さればそくばくの業を持ちける身にありけるをたすけんと申し立ちける本願のかたじけなきよ」と、御自身の遠い昔から、尽末来際にかけてつくりとつくる罪業の故にこの御苦勞をおかけ申したことよと煩惱具足の身を慚愧せられると共に、洪恩を謝しておられる。これこそ、「わが御身にひきかけて、我等が身の罪の深きことを知らず、如来の御恩の高きことをも知らずしてまどえるを思いしらせんとなり」と唯円大徳が聞きとられた通り、我が身を知る唯一の道である。

第一の無三悪趣の願をさくにつけても、我々が昼夜にたえず貪・瞋・痴の三毒の煩惱をまきちらして、その後始末も出来ないのを憐れまれて発起されたのである。

第四の無有好醜の願は、可愛さあまりで憎さ百倍というように、愛憎違順して傷つけ合っているのを悲しまれて、それを超えさせずばやまじとお誓い下さったのである。

第五の宿命通の願は、我々が唯現世のみにとらえられて遠い我身の過去を省みなかつたり、未来ばかりを夢みて空しく人生を終るのを見るに見かねて発起された悲願である。第八の他心知通の願も、我々が自分の利害ばかりを考えて、人の心を察し得ないのを憐れまれて、人の心が察知出

られないのである。

又、中井玄道師が「教行信証の中に、経文や師釈を聖人が引用されるについて、聖人独特な訓をつけられたのは、すこしでも善を出来そうに読みあやまり易いところを、丁寧にそうでないことをお知らせ下さるうためであった」と云われたと聞いている。たとえば「至心に廻向して」と一般に読んでいたのを「至心に廻向したまえり」と全く仏力によることを明らかにされ、善導大師の「内に虚仮をいだいて、外に賢善精進の相を現すること得ざれ」とあるのを「外に賢善精進の相を現すること得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」と訓みかえて下さったのも、迷い易い我等への周到な御親切からである。

以上のように、仏の御本願をよくよく聞かしていただく時、善導大師の二種深心「自身は現に是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でず」と信知し、今「弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声に及ぶまで定んで往生を得」と信知して、乃至一念も疑心あることなし、という信味を恵まれるのである。

来るようにしたいとの仏願である。其他の願も、この願をどうして発起して下さったのかと、よくよく案じ奉るとき、自然に我々の正体がそこに照らし出されるのである。

近角先生が「仏法を聞いて、自分が立派になるのではない。聞けば聞く程、階段を下るように、今迄すこしも気づかなかつた自分の愚悪さが知れて、地獄は一定の身が知らされてくる」と言われたことがある。

その一番よい手本は、聖人が「煩惱具足の我等はいずれの行にても生死をはなるることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」と、仏の慈光に照らされて、悪人が悪人であったとその正体を知られて、そこに如来の作願のましましたことを渴仰申されたのである。

しかも、二十九歳で念仏門に入られた聖人が、八十歳をすぎられて、愚禿悲嘆迷懷和讃に

浄土真宗に帰すれども真実の心ありがたし

虚仮不実のわが身に清浄の心さらになし

等々と、罪障のありつたけを打ち明けて下さって、五十年の念仏の御生活で、塵ほどもよくなったとは仰言ってい

## 御紹介

### 生死を越える道

花田 正夫 著

『歎異抄』に導かれて

定価 一、〇〇〇円 送料一六〇円

発行所、樹心社、東京都国立市富士見台二丁目七。一ノ五

ノ四〇三 振替、東京七―七五四四五。 ㊟一八六

電話、〇四二五―七七―二七七八

発売元、星雲社 東京都千代田区神田錦町三ノ六㊟一〇一

電話、〇三―二九四―五八一八

\*直接注文の時はなるべく発行元へ。書店注文の時は必ず発売元へ注文して下さい。

樹心社は今度 亀岡邦生さんが創立されました。亀岡さんは故松本解雄先生の教之子であり、愛媛大学の仏教青年会に居られました。卒業後、柏樹社で編集の仕事をしていられました。機が熟して独立、その最初の仕事として、私の本を出版したいとの申出がありました。その時、各方面から求められるままにあって発表した原稿が手元にありましたので、そのままお願いしました。八月末に出来まし

## あとがき

近角先生の信を求める人々に二つの傾きがあることを、実際の例をあげて御ねんごろなおさとしを掲げさせていただきます。日曜講話のままの筆録でありますだけに、話し言葉となつて、直接先生にお目にかかつてお聞きする趣きがあります。

池山先生は、信仰上十分に信頼し得べき人がみつかることが非常に大切であることを、一病青年の閉法の実例をあげておのべ下さいました。幸に私共にはよき人として親鸞聖人がお出まし下さっていますことは、この上もない慶びであります。本年二月に亡くなられた大谷専修学院長の信国淳師は「われら一向に念仏申して、仏天のもと青草びととなりて祖聖に続かん」と最後の言葉を遺されました。井上様は、ねんごろな蓮如上人の御勧めを詳細にお述べ下さいました。池山先生は或人に「団扇を前に置いて眺めていては涼しい風は来ない。お念仏も傍観してはそれのお味いは出ない」と云われたことも思いあわせました。

西元様は、叡山と高野の現状とそれによつて

来る原点を述べて下さいました。西元様なら  
ではの感を深くして読ませて貰いました。

木村さんは、少ない歯も痛むので抜いて貰  
つたところ、七十六では通用せず八十六と云  
うと皆んなが納得するありさまで、との報  
告。それだけに童顔の微笑の写真がなつかし  
まれることです。

親鸞聖人は自己反省が深いとよく世間に云  
われますが、人間の反省などは不徹底なもの  
です。聖人は本願の光によつて御自身の罪惡  
生死の姿を照らされた人であります。又パス  
カルの言葉に「キリストによつて神を知り、  
また自己を知つた」とあるのも他山の石とし  
て心を打つものがあります。私自身は「聖人  
によつて弥陀仏を知らされ、弥陀の本願に照  
らされて自己の正体が見えはじめました」  
そうしたことをお聞きして頂きたくて書きま  
した。仏の御目にうつる自己こそ、自分の正  
体と存じます。御一読願います。

秋の彼岸もすぎて、もの皆がみのりますに  
つけて、心のみりを迎えよと草木がささや  
いているように覚え、念仏の催促をうけてお  
ります。

## 〈御案内〉

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半  
一道会例会。一道会館の南隣り、  
南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅  
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三  
筋目、角。
- 地下鉄、新瑞橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四  
毎月二十四日、午前・午後。  
市バス、御器所通り又は北山下車。  
地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。  
(但し日曜を除く)尾西市三条板倉  
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価	半年	七〇〇円(送共)
	一年	一四〇〇円(送共)
編 集	・ 発行人	花 田 正 夫
		電話八二二局七〇三七番
印 刷	人	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
		名古屋市南区駈上町二ノ八八
発 行 所	慈 光 社	
		振替口座 名古屋 一〇四七〇番
		郵便番号 四五七